

童話作家アンデルセン デンマーク

新しい本を手にしたときインクの香りであろうか本の匂いがした。貧しい家であったが母親は子供の読みたい本には出し惜しみしなかった。

たぶん親の小言より本を読ませた方が、教育効果が大きかったように感じていたのかもしれない。アンデルセンの物語は大好きだった。マッチ売りの少女・おやゆび姫・みにくいアヒルの子・はだかの王様など、どれを読んでも飽きさせず面白く、そして読後には心にしみわたるような余韻を感じたものである。いずれも示唆に富んだストーリーで読むたびに多くのものを感得できた。

その頃を思い起こすと乱読ではあったが本の虫だった。三つ子の魂何とやら、成人してからも本に学ぶことは多かった。



アンデルセン像

先年コペンハーゲンを訪れた。デンマークと言うと酪農王国、チボリ、アンデルセンがまず頭に浮かぶが、市内をそぞろ歩きして印象深かったことは波静かな海岸の岩の上に、もの悲し気うつ向き、座していた人魚姫の像である。人魚姫はアンデルセンの物語の主人公である。折しも霧雨の霞むような天気の中での見学であった。友人は人魚姫の涙雨だといった。

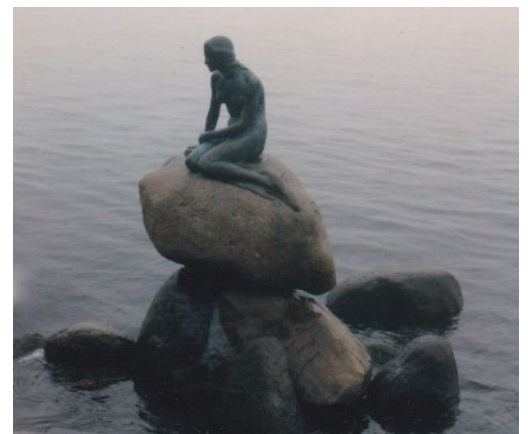
アンデルセンの著作は104カ国で翻訳され全世界の人々に親しまれている。ハンス・クリスチャン・アンデルセン（1805年～1875年）は、デンマークではホ・セ・アナセンと発音される。オデンセの貧しい靴屋の家に生まれた。生涯にわたり支援を受ける王立劇場支配人で国王の侍従であるヨナス・コリンの援助でデンマーク国王から奨学金をもらい海外へ遊学

する。ローマに滞在しイタリアの印象を小説“即興詩人”として著し、1835年デンマークで出版して大きな反響をよんだ。即興詩人はアンデルセンのデビュー作となる。同書はヨーロッパ各国で翻訳され、日本では1902年、森鷗外訳で春陽堂から出版された。

1843年パリを訪れユーゴ、バルザック、ハイネ、デュマなどそうそうたる文人たちと交友する。アンデルセンの作品は創作童話が中心であるが、小説や多くの旅行記もあらわしている。またちぎり絵が得意で友人の子供たちに切り絵を張り付けた本を送るなどしている。

70歳で肝臓がんを患い多くの人々から惜しまれながら死去した。没後足跡を記念して児童文学のノーベル賞といわれている「国際アンデルセン賞」が設けられている。生涯独身を貫いた。

余談であるがローマにアパートを借りて市内をくまなく歩きまわった。その時ガイド代わりに持参



海辺にある人形姫の像

した本が、森鷗外訳即興詩人岩波文庫である。文語体の本は読みにくかったことをふと思い出した。